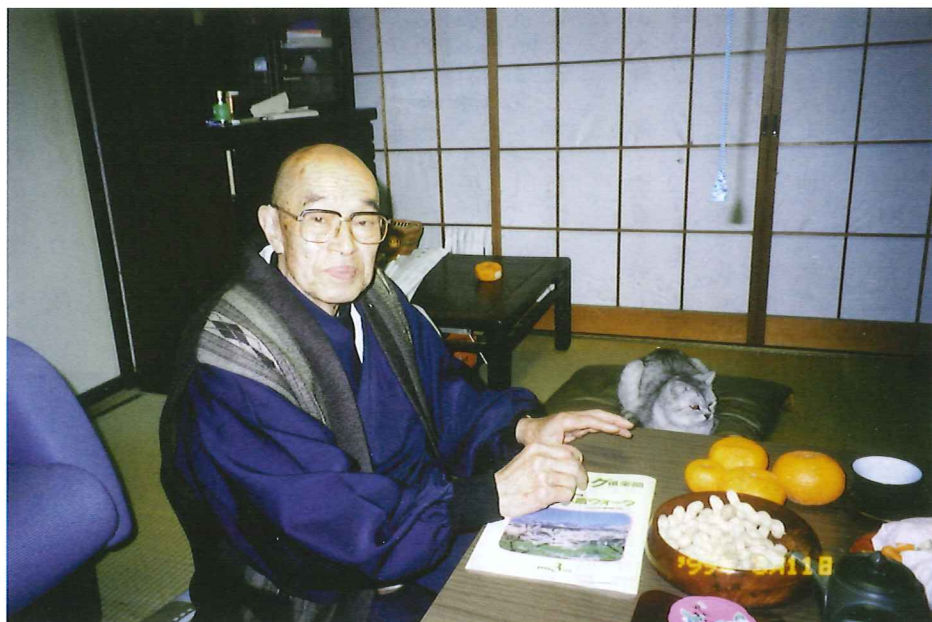




穆堂庵でくつろぐ丹羽圓宗和尚



指月

SHIGETSU

修禪寺・寺報
第 48 号

発行所 (〒410-2416)
伊豆市 修善寺 964
福地山 修 禪 寺
電 話 (0558) 72-0053
FAX (0558) 72-9680

師 匠

山主 吉野 真常

平成二十一年十二月十二日、
師匠・修禪寺四十一世穆堂圓
宗和尚が九十八歳で遷化致
しました。

亡くなる一カ月前、堀切・
泉龍寺の隠居を訪ねた時、師
匠は寢息をたてて氣持良そ
うに横になっていました。起
こさないよう静かに寢顔を覗
きこんだ時、涙が出てきたの
です。そして「ありがとうございます
でした。」
と言っておりました。今だか
ら書ける事なのかも知れませ
んが、この時『この出会いが
今生の最期かもしれない』と
思ったのです。

十二月十二日、兄弟子・耕
健兄より師匠危篤の連絡を受
けた時、『来る時が来たな。』
と言う思いの冷静な自分が居
りました。

二十年以上前、師匠が修禪
寺住職時代、数年間と一緒に
生活させて戴きました。修禪

寺住職になったからと言って
着る物も華美にならず、特別
に何かを買う事も無く淡々と
生きていました。まさに、少
欲・知足の人でした。

食事の時、師匠からよく聞
いた言葉があります。「真
常！ 比丘（出家僧）の口は、
竈の如しと言うんだぞ。」と。

師匠が修禪寺住職になるま
で、私は師匠が、赤や黄色の
衣を着た処を一度も見た事
がなかったのです。修禪寺住
職になり恥ずかしそうに黄色
の衣を着けた師匠を見た時、
何か師匠が少しずつ離れて行
ってしまうような気がして、
寂しかった事を覚えておりま
す。やはり師匠は、黒・茶・ね
ずみ色等の衣が似合いました
ね。私の師匠ですから。
泉龍寺並修禪寺で一緒に居
た時、私の室に来てこう言う
のです。「オメエは、いつも、
こむずかしい本を読んでいる
な。シヨッタ ヤロウダよ。」
こう言っている師匠の顔は、
いつもうれしそうに笑ってい
ました。

師匠の遺偈（高僧碩徳が入滅に際して、後人のために残す偈）にこうあります。

馬齢^{バレイ}愈^{ユエ}九十^ニ 猶^{ナオ}滞^ト是非^ジ辺^{ヘン}
霜曉^{スエ}閑^{カン}窓^{サウ}下^カ 孤^{ヒトリ}慙^{ザン}愧^{キス}瓦^ガ全^{セン}

『私は九十歳をこえるまで生きてきたが、まだまだ、勝つた負けた、良い悪い等の思い、分別の中に居るようだ。霜のふる寒い今朝、隠居で一人坐禅をしておる。そして、このように只在る事を慙愧するばかりだ。』と。

洞山大師、師・雲巖を辞し去る時、問て曰く「百年後、忽ち人あり、還て師の真を貌せしや否と問わば、如何祇對せん。雲巖良久して曰く「祇だこれはれ」と

『洞山大師が、師匠雲巖和尚の寺を去る時、師に尋ねた。「百年後に師匠の本当の姿は、どうであつたか尋ねられたら、どう答えれば良いでしようか？」雲巖和尚は、しばらく黙っていて、そしてこう答えた。「タダ、コレ是れ」と。』

いま良寛さん

修禪寺護持会会長

田口 行史

仏縁あつて、修禪寺四十一世穆堂圓宗大和尚の葬儀委員長を務めさせていただき、二月一日の納骨式まで見守らせていただきました。ご遷化から数カ月経たいま、老師との思い出が走馬灯のように目に浮かびます。

昭和四十年十二月、夜明け前のこと、当時町の広報担当だった私は、堀切の泉龍寺で、近所の子供たちを集めて坐禅する、坊さんの撮影をしておりました。

子供たちに囲まれたその姿が、テレビで全国放映されると、『いま良寛さん』と話題になったものでした。

それが若き丹羽圓宗老師との出会いであつたと記憶しています。門前に生まれ、寺の幼稚園児だった私ですから、当時堀切から修禪寺へ毎日通っていた老師のお姿を拝していたはずですが、その残像は失せております。

やがて、当山四十世丹羽廉芳老師の院代を経て、昭和六十年には



子供たちと丹羽圓宗老師（昭和40年・堀切泉龍寺にて）

私の退職通知に「期待したのに誠に残念……。」

と、お叱りの返書も届きました。近年はお会いするたびに、「あんた白髪になったなあ……。」

としか言ってもらえませんでした。が、お弟子の吉野真常老師が当山四十三世に内定したときには、ことのほかお喜びだった様子で、吉報が生前で良かったとつくづく思います。

昨秋に堀切の寺で見舞ったときは、自室でウトウトしていました。が、静かに手を握らせていただいたのが別れでした。

そんな老師の本葬儀の日、式も滞りなく進み、私は護持会長として謝辞に立ち、

「これからは、穆堂圓宗大和尚の法を継いだ吉野老師のもと、檀家一同仏道に精進することをお誓い致します。」

と、参列者の前で述べさせていただきました。

いまも寺で暁天坐禅と朝課の日々を続けております。

四十一世に就任。晋山式も無事済ませたころ、私は当時勤めていた観光協会の用事で上山し、窓口で用件を済ませて帰ろうとすると、「おい、上げれ！坊さんと付き合うのも仕事の内だろう。」と呼び止められ、旧庫裏で雑談した思い出があります。

その後は、いつ訪ねても庭で作業中のことが多く、草取りの手を休めて会話してくれる、気さくな御前様でした。

東堂として隠居されてからは、

丹羽さんからの 贈りもの

本町 原 京

丹羽圓宗老師の葬儀席上、修禪

寺の檀徒を代表して弔辞を捧げることができ、望外のしあわせを感じております。と同時によりおつき合いの深い方がおられたろうに、と申し訳なく思っております。と言いつつ、またも丹羽さんの思い出をつづろうとしているこの図々しさ、不快に感ずる方がいるかもしれませんがいし、お付き合いを願います。

弔辞では丹羽さんを私の父の親友、と申し上げましたが正しくは父にとって憧れの人でありました。父は、私の祖父と一緒に人権擁護委員などをしていたひとつ年上の丹羽さんと接しているうちに、その考え方、生き様に惚れ込んでしまったのです。中学での丹羽先輩は硬派で恐い存在だったといえます。格上の丹羽さんに対する父の片思いから始まって、お付き合いさせていたくうちに「原くん」「丹羽君」と呼び合う中となったようです。

いづれにしろ私がものごころついた頃には日常に丹羽さんの姿が

ありました。役場の帰りがけに我が家に寄り、一献傾けては呵呵大笑されていた、そんな記憶が始まりです。私は五人きょうだいの末っ子ですが、その頃は丹羽さんと呼ばずカンさんと呼んでいました。中学に上る前のことです。父があらたまった様子で言いました。

「いいか、カンさんじゃなくてカンスさんだ。監守というお寺の役職だ。丘球学さんのもとで監守をやっていたのだ。本名は丹羽圓宗という。」

反応は様々です。兄はとつくとんまに知っていたという表情をつくり、二番目の姉は

「へえつわたしやってつきりカンていう名前だと思ってた」と言いました。当時短大生だったその姉は高校の夏休みに、勉強に打ち込むと称して丹羽さんの堀切の寺、泉龍寺に一週間ほどこもったことがあるのです。それでいて本名を知らなかったとはあきれました。カンさんと呼ばれても平然と笑顔でこたえる丹羽さんには脱帽です。

その堀切のお寺に父のお供で何うと、囲炉裏を囲み、鉄瓶に沸いた湯を湯冷ましにとり、丁寧に、それはおいしいお茶をいれて下さいました。炉端を一步さがって奥様が満面の笑みで小僧の私をもてなしてくれます。その仕草に憧れて今、門前で茶店のオヤジをして

おりますが到底及びもつきません。

ある日、新聞紙上で、丹羽さんが長年にわたり点訳した本を施設に贈り続けていると知りました。

「俺も知らなかった。ひとことも口にしたこともない。本当のカッコ良さはこういうことだなあ。」と父はますます憧れのまなざしで言いました。私もいつしかそういう憧憬がつのり、高校を出たら丹羽さんの弟子になろうと決意し、父に申し出ました。一喝されたことを記憶しております。

「おまえのような奴につとまるわけがない。大体そんなことをしたらナマガサ坊主が一人増えるだけだ。」

後年このことを丹羽さんに伝えると大笑いされただけで何もコメントしませんでした。冗談と思われたのか、簡単にあきらめた私の腑甲斐なさを咄われたのか、今となつては知る由もありません。

父が亡くなると七日、七日にきていただき、お経をあげ、思い出を語ってくれました。私が店を開く際には「日は好日」の色紙を額装して贈っていただきました。仲人をしていただいたうえに夫婦に印鑑を作ってくれて、それを銀行印に使っております。もつとも残高はあまりありませんが。

最晩年、交際ある方々に「私はもういないものと思つて下さい。」

という旨、葉書を出されました。うまい具合に私には届きません。これ幸いと様子を見到伺ったり、年賀状を出したりしていました。最後にいただいた賀状は字が傾いたり、震えたりしています。これは我家の家宝であります。

本当のカッコ良さ、人を思いやる姿勢、まごころ、丹羽さんからいただいたものは全部宝物です。丹羽さん、私は修行足らずの俗物であります。丹羽さんは私の心の中で生き続けておりますので、どうか弟子にしてください、今後ともお導き下さるよう厚かましくお願いする次第であります。

節分会



○二月三日(水)、節分会大折棒が本堂にて厳修されました。法要後、僧侶や年男・年女の方々による恒例の豆まきも行われました。

今年は昨年の倍近い四十名を超す年男・年女の申し込みとなり、豆まきの舞台を増設しておこなわれました。皆元氣よく「福は内！」と豆を撒きこの福にあやかうという参詣者で境内は大盛況でした。

花祭り

○お釈迦さまの生誕を祝う「花祭り法要」が、今年も参加される方々の便をはかりまして生誕日三日後の四月十一日(日)に本堂にて厳修されました。法要後は、柴山崇志氏(柳生の庄取締役調理長・全日本居合道教士七段)による記念講話と居合奉納演武も行われました。大勢の参加者が熱心に耳を傾け、真剣な演武に見入っていました。本堂前にはお釈迦様のお生まれになったお姿の尊象「誕生仏」に甘茶をそそぐ(これを灌仏《かんぶつ》といいます)花見堂が置かれ、仏教婦人会役員さん接待のもと大勢の参拝者がお釈迦さまに甘茶をそそいでいました。



居合奉納演武

御寄付

- ぞうきん 四十五枚
— 小坂 鈴木登美男 様 —
- ぞうきん 五十枚
— 大沢 星谷りか 様 —
- 竹ホウキ 十本
— 北又 相原 清 様 —
- 坐禅堂用スリッパ 消毒清掃
— 上神戸 三省堂薬局 様 —
- 白米 十五キロ
— 中里 唐澤之泰 様 —
- もち米 三十キロ
— 大沢 星谷真弘 様 —
- 野菜 たくさん
— 堀切 水口信夫 様 —
- 干し椎茸 たくさん
— 北又 梅原 猛夫 様 —

平成22年度 修禅寺護持会・仏教婦人会役員名簿			
地 区	氏 名	備 考	
顧問・住職	吉 野 真 常	修禅寺	
会 長	田 口 行 央	遊覧町	
副 会 長	野 田 治 久	南町	
会 計	波多野 勤	上湯舟	
上 北 又	松 岡 啓 悟		
下 北 又	川 野 吉 人		
上 湯 舟	梅 原 正 直	幹事・庶務	
下 湯 舟	星 谷 佳 男		
西 紙 谷	田 沢 豊		
東 紙 谷	平 田 昭		
上 中 里	三 須 順 吉		
下 中 里	植 田 安 男		
小 山 坂	古 島 行 俊	幹事・庶務	
小 天 町	三 須 定 雄		
上 神 戸	河 合 弘 雄		
上 中 神 戸	飯 塚 清 丸		
下 中 神 戸	遠 藤 昌 輝		
下 神 戸	山 口 有 司		
桂 町	森 田 正 次	幹事・庶務	
遊 覧 町	木 村 真 宏	会 長 兼 務	
本 町	田 口 行 央	幹事・庶務	
南 町	原 京		
半 経 寺	飯 田 武 生		
下 修 善 寺	波多野 智 啓		
横 瀬	杉 村 厚		
駅 前	小 針 雄 一 郎		
堀切・熊坂	水 口 信 夫		
大 沢	星 谷 真 弘		
婦 人 会 長	大 川 久 子	南町	
副 会 長	三 須 た か	北又	
会 計	遠 藤 ヒデ子	大下	

火曜坐禅会

一月～五月四日迄の参加者数
延べ 二四三名

五月～十二月のお寺の行事です

- 五月十八日(火)午後六時半
「観音講」
- 七月十九日(月)
「頼家公・十三士供養祭」
- 八月一日(日)
午後六時「山門大施食会・盆踊り」
午後七時「第六回修禅寺寄席」
- 八月二十・二十一日(金・土)
「秋季弘法忌大祭」
※二十日(金)
午後七時半 万灯会
- 九月二十三日(木)午前十時
「秋彼岸会法要」
- 十一月七・九日(日・火)
「桂谷八十八箇所巡拝」
- 十二月八日(水)午前十一時
「釈尊成道会」
- 十二月二十二日(水)午後一時
「奥の院星祭り」
- 十二月三十一日(金)午後十一時
「除夜の鐘」

二十一日(土)

午後四時半 大祈禱会
午後七時半 川施食会
奉納花火大会

